

お話してよ、大先輩！

73年前の1枚のハガキ 志茂田景樹

僕には15歳年上の兄がいた。昭和20年（1945）

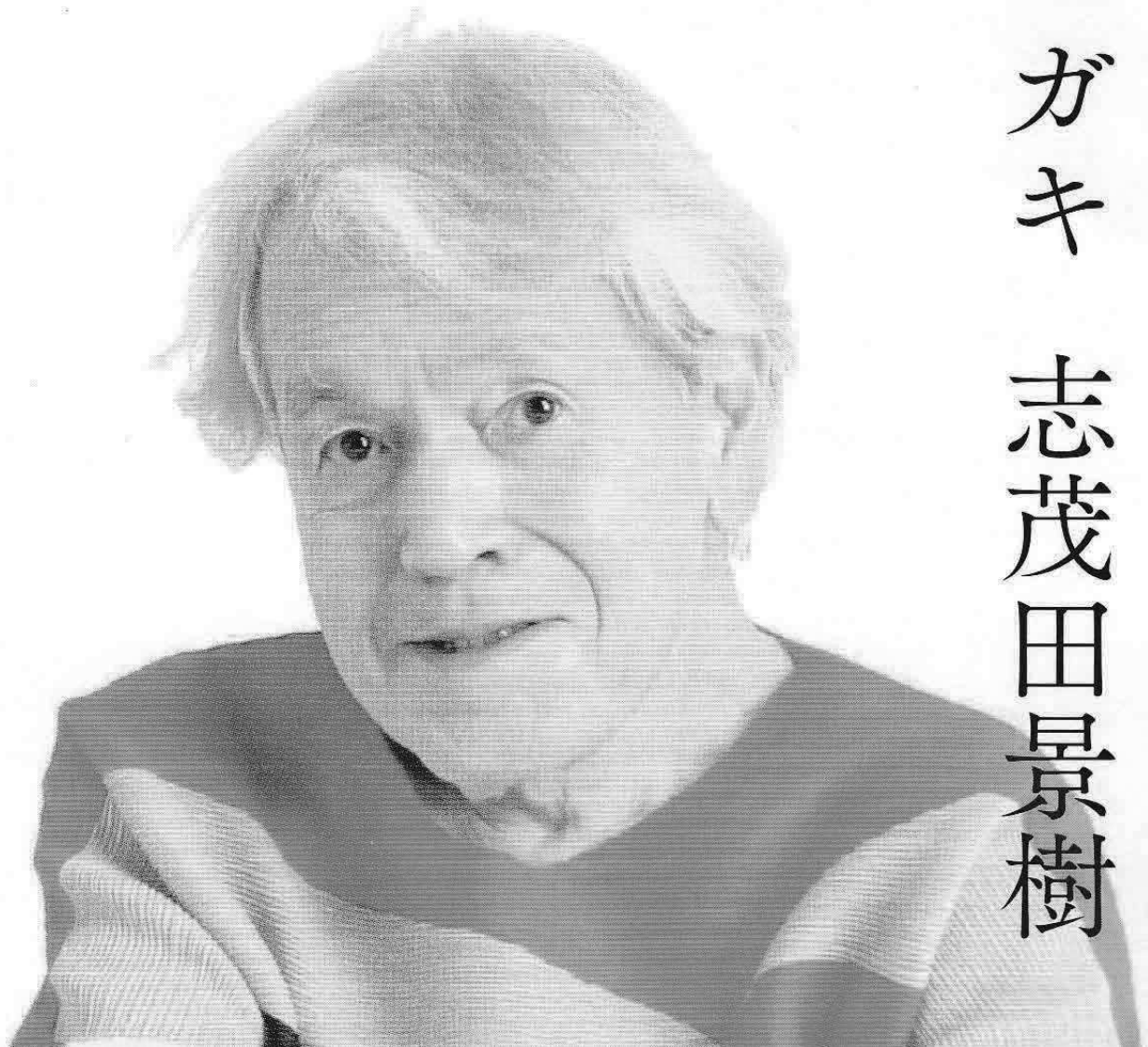
8月、旧満州（中国東北部）で戦死した。まだ満20歳だった。

その兄が出征する数日前から僕にカタカナとひらがなを教えてくれた。廊下の結露した窓ガラスに指で1文字ずつ書いて発音し、別の窓ガラスにその通りに僕が書いて発音するという要領で兄による僕への授業は進められた。

兄はその年の3月上旬に召集された。同月の25日が誕生日の僕は5歳になる少し前だった。

カタカナを終え、ひらがなの途中までやったという記憶がある。招集日がきてしまったため、兄はひらがなを途中までしか教えられなかったのである。

旧満州のソ満国境近くの兵営から、我が家にしばしば兄から「軍事郵便」という4文字が印刷されたハガキが届くようになった。ただ、そのハガキの宛名の多くは両親で、1部は2人いる姉たちだった。僕は母に不満を言ったらしい。



「自分からお兄ちゃんに書けばいいでしょ」

母に言われた僕は一生懸命長い時間をかけて書いたという。書いた記憶はうっすらと残っていても内容までは覚えていない。

兄から返事がきた。母の記憶では、僕はそれを枕の下に入れて寝たらしい。

その内容は左記の通りである。

忠男、兄チャンハ忠男ノ書イタジヲミマシタヨ。兄チャンハマンシュウヘクルトキオサケヲノミスギテヨツテ忠男ニケイレイヲシマシタネ。

忠男ハヒコウキノリニナリナサイ。マンシュウヘキタイトイッタネ、忠男ガゲンキデベンキヤウシテイルノデ兄チャンハウレシイデス。

テキノヒコウキハマイニチキテイルデセウネ、忠男、ハヤクヘイタイサンニナツテ、テキノB29ヲオトシナサイ。オトウサンオカアサンノイフコトヲヨクキキナサイ。デハマタテガミヲクダサイ、サヨウナラ。

忠男ノ兄チャンヨリ

これは兄からきた最初で最後のハガキになった。旧満州へ兄が到着して数か月間は、日本の敗色が濃厚だった時期にもかかわらず、平和な大地だった。し

かし、8月9日、旧ソ連軍の大群が雪崩を打って侵攻してきてからは旧満州の大地は悲惨な戦場に一変した。

兄のいた部隊は戦車を先頭に進撃する旧ソ連軍に蹴散らされ、バラバラに敗走し、兄が属する1隊は8月15日の終戦を知らず戦い続けて8月23日の未明に全滅状態に陥ったと言われる。

しかし、そのことが確認されたのは2、3人の生き残りが抑留先のシベリアから帰還して証言してからのことで、それまでは我が家のみんながそのうち戻ってくると思いきんでいた。

翌昭和21年4月、僕は小学校に入学したが、兄の抑留先の住所が解ったらすぐに手紙を書くつもりだった。書き出しはもう決めていた。

兄ちゃん、ひらがなの続きは学校で教わったよ。

その書き出しで兄に手紙を書くことは、戦死が確認されて永久になくなったが、唯一の兄からのハガキは僕の永遠の宝物になった。

もう何百回読み返しただろう。

読み返せば廊下の窓ガラスにカタカナを書いている兄の姿が浮かび上がり、僕の胸に元気と勇気が湧き上がる。

プロフィール

志茂田景樹(しもたかげき)

作家・よい子に読み聞かせ隊 隊長

1940年静岡県生まれ。1980年小説「黄色い牙」で第83回直木賞を受賞。その後「笑っていいとも」などバラエティー番組にも多く出演。1999年には読み聞かせの必要性を痛感し「よい子に読み聞かせ隊」を結成、自ら隊長となり読み聞かせメンバーとともに全国各地1900回以上の読み聞かせ活動を行っている。2014年「キリンがくる日」第19回日本絵本賞読者賞【山田養蜂場賞】受賞。Twitterのフォロワーが38万人を超えるなど、多くの若者にも支持されている。

公式ホームページ<http://www.kageki.jp/>